

多文化共生社会を実現するために日本語学校にできることとは

—「日本語ボランティアチューター活動」の実践から—

惟任 将彦

名古屋YMCA日本語学院主任教員

1. 本稿の目的と「日本語ボランティアチューター活動」の概要

筆者は現在、日本語学校に勤務しており、おもに留学生¹を対象に日本語教育をおこなっている。2018年4月に開校した勤務校には、2019年3月時点で39名が在籍しているが、一般コースであるため、進学以外の目的で学習する者も多い。

勤務校においては、主任教員として教務全般を担当するとともに、「日本語ボランティアチューター活動」（以下、チューター活動）のコーディネーターも担当している。「日本語ボランティアチューター」（以下、チューター）とは、勤務校の留学生と週に1回、1時間程度会話をする日本人ボランティアのことである。

チューター活動は1987年に大阪YMCAで始められたが、当時の担当教員によると、その趣旨は、

- (1) 学校の入った建物の1階（入口）と3階（学校）に急に増えた外国人が何をしている人たちなのかを、近隣で働く人に知ってほしい
- (2) 当時よく言われていた「国際化」について、一般の人にもコミュニティーの問題、自分の問題として一緒に考えてもらうきっかけにしたい
- (3) 学習者に教室内の日本語とは異なる日常的に使われる日本語に接してもらいたい

であったという。そして、この活動によって、学習者は日常交わることのない人たちと出会い、教室の中では知ることができない日本について知ることができたとのことである。上記教員は、多文化共生社会は「一人ひとりが思い思いに（活動参加を呼びかけるために使ったキャッチフレーズ）」参画できる入口から活動を始めることで実現できるとの思いでチューター活動を始めたという。その後、この活動は福岡や横浜のYMCAにも広がっていき、現在に至る。なお、筆者は以前、大阪YMCAにおいてチューター活動のコーディネーターを約3年間担当していた。

しかし、そのころからチューター活動については、1対1のマッチングや活動を継続させることの困難点、チューター間の交流や情報交換の機会の少なさ等が課題となっていた。

そこで、以下に本稿では、チューターに対しておこなったインタビューから課題を浮き彫りにし、それを改善するためにコーディネーターとしてどのような実践をおこなったか、そして、今後どのような実践をおこなう必要があるかを述べる。まず、第2章においてチューター活動の概要と課題を述べる。次に、第3章では研究課題を、第4章では研究方法（インタビュー）について述べる。次に、第5章でインタビューの結果と考察を述べ、第6章においてそれを踏まえておこなった実践を述べる。第7章では第5章と第6章から明らかとなった今後の課題について述べる。そして、第8章ではまとめをおこなう。

2. 勤務校におけるチューター活動の概要と課題

勤務校においては、月曜日から金曜日までの12:15～13:15、12:45～13:45、14:00～15:00、17:15～18:15の4つの時間帯に、3月の時点で17組が活動中であるが、原則として、活動は勤務校の6階でおこない、留学生が修了するまで続けることになっている。チューターの募集は勤務校のホームページ、チラシ、ボランティア情報誌への掲載、ボランティア情報サイトでおこなっている。活動希望者からチューター登録用紙を受け取った時点で登録完了となり、マッチングを始めるが、その際には、活動時間帯、年齢、性別、海外での生活（外国語学習経験も含む）やボランティア経験の有無、そして、事前に見学等で来校されたときの印象等を参考にしている。このようなチューターの募集とマッチングが筆者の主な業務になる。

勤務校に在籍する留学生の多くはアルバイトに従事しており、日本人の友人もいないことから、チューター活動の時間が教師以外の日本人と接する貴重な時間になっていることが留学生やチューターのコメントから想像される。また、教員には相談できないような個人的なことも、チューターには相談できるという話も聞いたことがある。さらに、海外での留学生募集の際にも、勤務校の特色の一つとしてチューター活動について説明していることから、日本語学校を選ぶ際のポイントの一つになっていることもあるようである。

しかし、中には活動が継続できないペアもある。原因としては、介護やアルバイトなど双方の事情をはじめ、チューターの日本語がわかりにくいこと等が考えられるが、実際はどうかよくわからない。一度活動を始めたら、留学生が修了するまで続けるという原則自体に問題があることも考えられる。また、筆者は留学生とチューターの双方に対して、金銭の貸し借りはしない、保証人にはならない等のオリエンテーションはおこなっているが、活動の現場に立ち入ることはなく、毎回の活動でどのようなことを話しているのか、活動の際に困難を感じることはないか等の活動の実態については把握できていない。そのため、チューター活動の意義について頭では理解しつつも、その活動が本当に留学生とチューターの双方にとって有意義なものとなっているかどうか、また、有意義な活動であるなら、どの点でどのように有意義なのかを知らないままでいた。

筆者は惟任（2017）において、留学生と日本人が直接接触し、お互いに新たな気づきが生まれ理解が促進されれば、差別・偏見の低減につながり、その積み重ねが多文化共生社会の実現に寄与するのではないかと述べたことから、留学生とチューターが活動の際にどのようなことを話し、お互いにどのような気づきを得ているのかを明らかにする必要があると考える。

3. 研究課題

以上を踏まえて、本稿ではチューターを対象に半構造化インタビューをおこない、そこで得られた情報からコーディネーターとしての筆者の取り組みについて省察し、筆者自身がこれまでのチューター活動において、どのような役割を果たしていたのか、そして今後どのような役割が求められるのかを明らかにしたいと考える。

4. 研究方法

（1）調査協力者

調査協力者は勤務校のチューター4名である。性別、年齢、職業、インタビュー時のチューター活動歴、およびインタビュー実施日については表1の通りである。

表1 調査協力者の性別、年齢、職業、チューター活動歴、インタビュー実施日

名前	性別	年齢	職業	活動歴	実施日
Aさん	女	10代	高校生	1か月	2018年12月12日
Bさん	女	20代	大学生	9か月	2019年2月1日
Cさん	女	50代	主婦	8か月	2018年12月12日
Dさん	男	70代	無職	8か月	2018年12月17日

（2）質問項目

インタビューを実施するにあたり、以下の質問項目を作成した。

- （1）チューター活動を始めた動機は何ですか。
- （2）チューター活動ではどのようなことを話していますか。

- (3) チューター活動の際に意識していることや、気をつけていることはありますか。それは何ですか。
- (4) チューター活動をしてよかったと思うことはありますか。それは何ですか。
- (5) チューター活動をしていて困ったことはありますか。それは何ですか。そのときどうしましたか。
- (6) チューター活動をして何か気がついたことや、自身の変化はありますか。それは何ですか。
- (7) 一人の人とずっと活動したほうが良いと思いますか、それとも定期的に相手を変えて活動をしたほうが良いと思いますか。それはどうしてですか。
- (8) チューター活動について改善したほうが良いことはありますか。それは何ですか。

なお、インタビューはすべて勤務校においておこない、許可を得た上で録音した。時間は一人当たり 30 分程度であった。

5. 結果と考察

インタビューの結果から様々なカテゴリー化が可能だが、本稿では「日本語の調整」「若い世代の育成」「偏見・差別の低減」「チューター活動の形態」の 4 つの観点から考察する。

(1) 日本語の調整

留学生と話すときに気をつけていることについて、B さんは次のように述べている。

外国の人と話すときも、普段日本人の友達と話すときとはちょっと違った話し方（になり）、敬語とかもあまり使わなくなるので、外国の人と話すときは、そういうモードになるというか。なので、あまりギャップとかは感じなくて、自分の中で勝手にそういうモードになりますね。

また、C さんは次のように述べている。

なるべくお話ししたそうな感じだったら、間違ってもいいので最後まで自分の言葉を見つけて、お話ししていただきたいということを気をつけています。あと、たぶん新しく習ったであろう単語がなかなか出てこなかったり、最初出てくるけど、最後の方、日本語わからないぞというときもゆっくり話してもらおうか、いっしょにちょっと調べて、それを話してもらおうようにしています。

このコメントからは、留学生と話すときに日本語を質・量ともに調整していることがわかるが、B さんは小学生のころに海外で暮らした経験が、C さんは中国での留学経験が影響していると考えられる。文化審議会国語分科会（2018）では、地域日本語教室等での「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」中の「技能」として

(1) 分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。

(2) 学習者の発話を促すために、耳を傾けると共に自身の発話を調整することができる。(27)

が挙げられていることから、今後は外国人と接した経験を持たないチューターや活動に困難を感じているチューターを対象に、日本語の調整に関する研修が必要になると考える。

(2) 若い世代の育成

チューター活動による自身の変化について、高校生の A さんは次のように述べている。

あとは、なんとなく過ごしていて、あ、これとかは（留学生には）わかんないだろうとか、そういうのにちょっと敏感になりましたね。（中略）自動車学校に通い始めたので、道路標識とか見ても、町の名前とか、場所の名前がローマ字のときと、ちゃんと市役所が英語になっているとか、体育館がちゃんとジムになってたりとか、そういうので、ごちゃごちゃじゃないですか、今。これはちょっと（留学生にとって）厳しくないかとか、思うときはありますね。

また、大学生の B さんは次のように述べている。

やっぱり名古屋って外国人の方いないのかなって思ってたんですけど、留学生。やっぱり大阪とか東京の方が観光客としてもよく見るしって思ってたんですけど、こんなにいるんだっていう、気づいたこととか。

A さんと B さんのコメントからは、留学生と知り合うことにより、日本社会に対する気づきが得られたことがうかがえるが、これは多文化共生社会を実現する上で重要な変化だと言える。山田（2018）では、以前とは違い、最近では外国人問題に関心を持つ有権者が増えてきており、それが票になると言う議員が出てきたことが述べられているが、選挙権が 18 歳からある現在、若い世代が社会に興味を持ち、政治参加の重要性に気づくきっかけにチューター活動なる可能性があると考えられる。

(3) 偏見・差別の低減

チューター活動による自身の変化について、B さんはコンビニで働いている外国人を見て、「がんばっているな」と優しい目で見えるようになったと述べている。また、C さんも次のように述べている。

留学生と知り合ったおかげで、ベトナムとか台湾という国がものすごく私に迫ってきて、あの、ニュースでも、耳が立ちますよね。やはりね、興味が全然違う。あと、彼女たちの年代も見ると、それもまた気になりますよね。コンビニで働いている留学生の子を見ても気になるんですよ。

このコメントからは、チューター活動が外国人に対する偏見・差別の低減に寄与していることがうかがえる。偏見研究の第一人者であるオルポート（1968）は、偏見は相手に対する無知や誤解が引き起こすものであり、接触することにより解消されるとする接触仮説を提唱しているが、その際に重要な点として、お互いが対等の関係であることと、共通の目標を追求することを挙げている。チューター活動においては、「教える—教えられる」ような「先生—学生」の関係では対等の関係とは言えないだろう。その点で、BさんとCさんが留学生の勉学に対する姿勢や、将来計画がはっきりしていることに刺激を受けたと語ったことは、対等な関係の表れと言えるのではないだろうか。

ボランティア日本語教室におけるボランティアと学習者の関係性について森本・服部（2011）は、「教える人—教えられる人」「ボランティア—学習者」以外の関係性（「母親同士」「職業経験者同士」「異なる世代に属する者」等）を積極的に創り出すことの重要性を述べているが、Aさんの以下のコメントはこのことを示唆していると考えられる。

筆者:なるほど、そうですか。ええと、そうすると、◇◇さん（留学生）、年齢的にも結構上ですかね、あのAさんよりも、お姉さんというか、どういう感じで話をするんですか。その、ため口というかどんな感じで。

A :お姉さんですね。お姉ちゃんよりちょっと上。

筆者:なるほど、もうちょっとなんかしっかりしているというか、そんな感じで。

A :なんか、学校でも新任の先生とかの感じですよ。

「お姉ちゃんよりちょっと上」の「新任の先生」というコメントからは、上記の「異なる世代に属する者」として交流していることがうかがえる。また、BさんやCさんのコメントからは、海外生活、および留学経験を共有する者同士として、留学生と接していることがうかがえる。さらに、Cさんの「息子受験生なんですけど、来年。あの留学生の子たち見てたら、なんだってやれる雰囲気だよなって、ほんとにもう」というコメントからは「母親（Cさん）—子供（留学生）」の関係性も見えてくるが、これも「異なる世代に属する者」としての交流だと言えるだろう。このことは約50歳の差があるDさんのペアにも言え、そこにはともに「音楽を愛する者」としての共通点がある。

こうしてみると、AさんとBさんから留学生の日本語に関する質問に答えたというコメントがあったが、日本語学校の留学生である以上、日本語に関する質問があるのは当然であるし、それが活動の妨げにはなっていないようである。おそらくそれは、留学生は普段の授業で日本語の専門家である日本語教師から日本語を学んでおり、そこでは「先生—学生」という関係性が（いいか悪いかは別として）前提となっているからではないだろうか。森本（2009）では、ボランティア日本語教室における「先生—学生」という権力関係は、専門性という点で「先生」にはなれないが、日本語を完璧に操る者として外国人の「支援」をしているボランティアだからこそ生じる関係であることが述べられているが、今後また

ます外国人住民が増え、多文化化していく日本社会において、外国人と対等な関係を築くことができる人材を育成するには、「先生－学生」「ボランティア－学習者」の関係性が希薄で、多様な関係性を構築しやすい日本語学校における交流活動が非常に重要になると考える。

（４）チューター活動の形態

チューター活動の形態について、Bさんは次のように述べている。

一人から二人に増えてなんかすごいしゃべりやすくなっただけですけど、会話の量も増えるし、盛り上がるし、すごいそれはやりやすくなって思いました。一人が体調悪くて休むってなっても、もう一人の子はいけるから、あ、じゃ、二人でやろっかとかということもあったし。

また、他の3名のコメントにも共通していろいろな日本人と話せるようにした方がいいとあったことから、今後は一人のチューターに対し、複数の留学生がかかわる形態にしていく必要がある。特に、チューターが不足している現状を考えてみても、これは有効なのではないかと考える。また、留学生にとっても、他のクラス、あるいは他の地域から来た留学生と知り合う機会になり、より多くの気づきを得られることが期待できる。

6. インタビュー後の実践

以下にインタビュー後の実践として「活動形態の見直し」「チューター募集」「見学・相談の実施」「学校行事の案内」について述べる。

（１）活動形態の見直し

5-4で述べたことを踏まえ、活動形態については、2組を1対1から1対2へと変更した。このうち1組のチューターからはとても話しやすくなったというコメントがあったが、もう1組については、2名の留学生の興味や日本語力の違いから、結局それぞれ別の曜日に1対1で活動することになった。このことから、今後1対2にする場合は、2名の興味や日本語力に配慮する必要がある。また、偶発的な事情により、新たにチューターに登録したEさんが他のペアの活動に加わり、チューター2名と留学生1名の活動をおこなったことがあったが、先輩のチューターからアドバイスがもらえてよかったということだった。このことから、実際に留学生との活動を始める前に1度、他のペアの活動に加わってみることで、外国人と接することへの不安が軽減できるだけでなく、チューター同士の横のつながりもできるのではないかと考える。特に活動時間帯によっては、1組しか活動していないことがあることから、不安や孤独を感じるチューターがいる可能性もある。なお、Eさんは通院中のため、月に2回の活動になっているが、チューターの事情に応じて必ずしも週

1回の活動でなくてもいいのではないかと考える。また、3月14日（木）には、チューターFさんとペアになっている留学生が約束を忘れてしまったことがあったが、学校に残っていた2名の留学生と急きょ活動してもらうことにした結果、楽しかったとのことだった。このことから、今後は固定的なペアとして活動するのではなく、留学生とチューターの双方が都合のいい日時に集まり、その場にいる人と自由におしゃべりを楽しむという流動的な形態にすることも検討したい。そうすればより気軽に参加する人が増えるのではないだろうか。

（2）チューター募集

AさんとBさんから改善点として挙げられていたチューター不足を解消するために、2月に重点的に募集活動をおこなった。まず、海外留学経験のある日本人大学生が中心となって活動している言語交換のサークルと、高齢者向けの大学に通う学生たちに向けて募集をおこなったところ、新たに4名が登録した。また、Aさんから活動に興味を持っている高校生を8名紹介してもらい、活動に関して説明をしたところ、2名が登録した。これ以外にも募集チラシの設置場所を増やすために、区民センター等を回った。その後、高齢者向けの大学の学生からの登録がさらにあつたが、先の登録者を含め、これは勤務校の非常勤教員の夫からの紹介であったことがわかった。また、ボランティア情報掲載誌を見て、登録した人もいた。その結果、4月26日時点でのチューター登録者は、すでに活動を終了した人も含めるとのべ53名となり、そのうち35名が活動中、あるいはマッチング中の状態である。

（3）見学・相談の実施

これまでチューター活動に関する問い合わせがあり、登録用紙を送ったが、登録に至らなかったり、活動を見学したが登録には至らなかったりしたことが散見されることから、問い合わせのあった人で希望があれば、一度学校へ来てもらい、チューター活動だけでなく、普段の授業の様子も見学したり、活動に対する質問や疑問にチューターから答えてもらったりすることにした。2月28日（木）に2名の見学・相談があつたが、2名とも外国人と接したことがなく不安があるとのことだったので、日本語だけでいいこと、希望があれば、筆者とともに活動に参加し、サポートすること等を伝えた。また、当日はスピーチの発表もあつたため、Dさんとともに活動見学の前に授業見学に入ってもらい、留学生の様子や日本語のレベルについても確認してもらった。終了後は2名とも留学生の日本語力に驚いた様子だったが、結局1名が登録した。また、3月13日（水）に2名の見学・相談があつたが、活動見学後にチューターと筆者を加えた4名であらためて相談の時間を設けた。その結果、1名が登録した。

その後、4月の新学期開始後に5回実施したが、見学者に共通するのは、活動を始めることに対する不安があることである。特に日本語だけで大丈夫なのか、話題がなくて話せなくなるのではないかというものが多く見られたが、活動中のチューターから直接活動の

様子を聞くことにより、不安が軽減されたようであった。また、週1回の活動を1年以上続けなければならないのかといった質問もあり、これについては、チューターに負担がかからないように調整してもらってもいいとした。さらに、学校外で会ってもいいかという質問もあったが、これについては、勤務校における活動をした上でなら、学校外での活動も可能だと伝えた。このことから、まずは広く一般に向けたチューター説明会や授業見学を含む学校見学会を実施することにより、勤務校の存在を知ってもらうのはもちろん、留学生の様子を知ってもらい、そこからチューター登録へとつなげる方法も効果的なのではないかと考える。

（4）学校行事の案内

3月に、チューターに学校行事の案内を送ったところ、4月5日の入学式には3名のチューターが、4月13日の新入生歓迎会には9名のチューターが参加したが、そのうち9名がマッチング中の状態で、筆者が初めて会う人もいた。参加したチューターからは、「とても楽しかった」「いい会で活動を始めるのが楽しみになった」といった声を聞くことができた。この9名の中には活動可能時間帯の関係でチューター活動は始めていないが、終業式やスピーチ発表会等に何度も参加してくれるチューターもいることから、チューター活動以外の行事や授業への参加を積極的に促していきたいと考える。なお、5月14日の遠足にもすでに7名のチューターから参加申し込みがあった。

7. 今後の課題

以下に今後の課題として「チューター同士のつながり」「オリエンテーションの見直し」「コーディネーターとしての役割」について述べる。

（1）チューター同士のつながり

Cさんから、チューター同士で情報を交換する場があればいいのではという提案があったこと、また、6-1において、先輩チューターからのアドバイスがEさんの不安を軽減したことから、今後はチューター同士の横のつながりを構築していくための取り組みが求められる。そのためにはまず、チューターが集まり、お互いに日頃の活動について情報や悩みを共有する場を設け、課題を見つけることから始めたい。

（2）オリエンテーションの見直し

先日、Eさんから、どんなことを話せばいいかわからないとの相談を受けたが、チューターがいつも会話をリードし、留学生がそれに答える形では対等の関係とは言えないだろう。この点について萬浪（2015）も「外国語学習での一般的な初級授業における『質問に答える』という練習の多用も影響しているのではないか。対等な関係の中で会話の上達を目指すためには、学習者の能動的な姿勢が欠かせない」（萬浪 2015：79）と述べた上で、

学習者への助言²、および研修が重要だとしていることから、5-1 で述べたようなチューターへの研修だけでなく、留学生へのオリエンテーションの見直しも求められる。このような双方への働きかけを続けることにより、萬浪（2015）の言う「居場所感」が高まれば、チューター活動に継続的にかかわる人が一人でも増えることになり、チューターの確保につながるのではないかと考える。

（3）コーディネーターとしての役割

文化審議会国語分科会（2018）の分類に従えば、筆者は「日本語教育コーディネーター（主任教員）」にあたるが、勤務校の教育目標・方針³として「多様な国際社会の中で多文化共生を実現し、平和な社会を創造する人材を育成」することを掲げるのであれば、これ以外に「多文化社会コーディネーター」⁴としての知識・技能・態度⁵が求められるのではないかと考える。特に外部との連携という点では、チューター研修の際に「やさしい日本語」⁶に詳しい講師に協力を依頼すること、また勤務校を外部に向けて開かれた場にするという点では、6-3 で述べたように、一般向けのチューター説明会や学校見学会を実施することが考えられる。また、杉澤（2016）は多文化社会コーディネーターの役割を「参加→協働→創造のプロセスの循環を推進する」（杉澤 2016：37）ことだとしているが、筆者は、チューターが集まり（参加）、活動に関する課題や改善点について共有、対話し（協働）、よりよい活動の仕組みを作り上げる（創造）プロセスの循環を推進しているとは言えない。推進するためには、7-1 で述べたようなチューター同士の情報交換の場を作り、その上で、研修等、チューター活動をより充実させるための取り組みを続けることが必要であるが、まずは6-1 で述べたように、活動に不安や孤独を感じているチューターがいる可能性があることから、これまではあいさつ程度だった活動終了後のチューターへの声かけを、活動でどのようなことを話したか、活動で困っていることはないか等の内容に変えていきたい。また、より多くの人の参加を促すために、HP や SNS 等を通じて普段の活動の様子を発信する等の情報発信も必要だと考える。現在、チューターにはスピーチ発表会等の授業見学や、遠足やバザー等の学校行事への参加も積極的に勧めているが、チューター活動以外にも留学生とかかわる機会が多くあることもあらためて周知していきたい。

8. おわりに

2019年4月より、外国人労働者受け入れを拡大する改正出入国管理・難民認定法（入管難民法）が施行されることにより、今後ますます地域に暮らす外国人は増え、多文化化が進むと考えられる。そのような時代にあって、勤務校が掲げる日本語教育の目標・方針の一つである「多文化共生を実現し、平和な社会を創造する人材を育成」するためにできることは、「留学生と日本人が良好な関係を築くことができるような交流の場を企画、実施し、そこから新たな課題を発見、検討し、より良い交流の場にしていく」ことなのではないかと考える。これは、7-3 で述べた多文化社会コーディネーターの役割と重なることから、

それを実現するために必要とされる知識・技能・態度を筆者自身が身につける必要がある。このような交流の場づくりを続けることは結果的に、勤務校を地域に開かれたものにするにつながるだろう。そして、交流を通して日本人と良好な関係を構築することができれば、将来、その留学生が母国や日本、あるいは第三国において、BさんやCさんがそうであったように、外国人と積極的に交流し、その地域の多文化共生に寄与する人材になるのではないかと考える。このことは日本人の側にも言えることであり、勤務校の日本語教育の目標・方針の一つである「多文化共生を実現し、平和な社会を創造する人材」とは、留学生だけを指すのではなく、日本人も含む。

最後に、今回インタビューした4人は日本語教員を志望していたり、海外での生活、留学経験があったり、英語を駆使して外国人と交流した経験を持っていたりした。しかし、そのような日本人は非常に少数派であり、今後より良い社会を実現するには、多数派のおそらくは外国人とじっくりと話したことがない人が外国人と交流する場を作る必要がある。どうすれば多数派を巻き込むことができるかという点について山田（2018）では、5-2で述べたように最近外国人問題に関心を持つ有権者が増えてきており、それが票になると言う議員が出てきたこと、また、今後、地方参政権が外国籍住民にも付与される可能性があることが述べられた上で、「マジョリティ側に自分たちの利益、自分たちに関わるということを知らせていくことが肝要」（42）であるとし、「そのためにも大切なことが、日本人と外国人が同じ地域社会で生活しながら関わるものがほとんどない現状を変えていくこと」（42）だとしている。このような現状を変えるためのささやかな取り組みの一つがチューター活動だとするなら、課題をひとつずつ解決しながら、それを地道におこなっていくことこそが「多様な国際社会の中で多文化共生を実現し、平和な社会を創造する人材を育成」するために筆者にできることであり、ひいては勤務校が多文化共生社会の拠点として機能するために求められることではないかと考える。

[註]

- 1 勤務校には留学ビザでない学習者もいるが、ここでは「留学生」で統一する。
- 2 具体的には次の4点である。
 1. 相手よりもたくさん話す
 2. わからないときは遠慮しないで確認したり繰り返したりする
 3. 話の流れを自分で作る
 4. 考えているときに相手が先に話そうとしたら待ってもらおう（80）
- 3 勤務校における日本語教育の目標・方針は

- (1) 日本人との交流及び文化体験を通じて、国際社会の一員として国際間の相互理解に寄与できる人材を育成します。
- (2) 日本での就学・就業を希望する外国人に対して日本語学習を支援し、日本国内で自律できる人材を育成します。
- (3) 多様な国際社会の中で多文化共生を実現し、平和な社会を創造する人材を育成します。

である。

4 杉澤（2016）によると、多文化社会コーディネーターは、

あらゆる組織において、多様な人々との対話、共感、実践を引き出しつつ、「参加」→「協働」→「創造」の問題解決へのプロセスをデザインしながら、言語・文化の違いを超えてすべての人が共に生きることのできる社会に向けて、プログラム（活動）を構築・展開・推進する専門職（16）

のことである。

5 杉澤（2016）によると、多文化社会コーディネーターに必要な知識とは、

業務上求められる固有の実践領域の知識とともに、多様な人、組織・機関との連携・協働を推進するために多文化化に掛かる分野横断的な横軸の知識（36）

のことであり、具体的には司法、労働、医療、政策・行政、福祉等に関する知識である。また、求められる技能については、コーディネーターの役割を「参加→協働→創造のプロセスの循環を推進する」（37）こととした上で、情報の収集・編集・発信力等の「基礎的实践」、プレゼンテーション力等の「中核的实践」、膨大な情報を選別して管理する能力等の「省察的实践」（「<わざ>による実践」とに分けている。そして、態度については、

価値観が異なる人々との関係をコーディネーションする際には、問題を表に出し目に見えるものとしていく価値観、また、自らの能力の限界を認識し双方向で吟味を行うという「ひらく（開く・拓く）」という態度（38）

が重要になると述べている。

6 庵（2013：7）は「やさしい日本語」について、外国人の使用する日本語を理解し、その日本語に合わせて自身の日本語を調整する過程に共通言語として存在するものだと述べている。

参考文献

庵功雄（2013）．「第1章『やさしい日本語』とは何か」、庵功雄・イ・ヨンスク・森篤嗣

『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために—』、ココ出版、pp. 3-13.

オルポート、G. W. (1968). 『偏見の心理』、培風館、(原典: Gordon W. Allport 1958 *The Nature of Prejudice*, Doubleday & Company)

惟任将彦 (2017). 『日本語学校で学ぶ留学生の日本人イメージに関する調査』、関西大学外国語教育学研究科修士論文.

杉澤経子 (2016). 「多文化社会コーディネーターの知と専門性評価の枠組み」、杉澤経子編著『多文化社会コーディネーターの専門職の知と専門性評価—認定制度の構築に向けて』、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、pp. 16-72.

文化審議会国語分科会 (2018). 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告)』

萬浪絵理 (2015). 「ボランティア研修の実践からみる日本語教育コーディネーターの役割—『聴くこと』でつなぐ2つのことばの教育』、『多言語多文化—実践と研究 Vol. 7』、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、pp. 68-91.

森本郁代 (2009). 「7 章 地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」、野呂香代子・山下仁編著『新装版正しさへの問い—批判的社会言語学の試み』、三元社、pp. 215-247.

森本郁代・服部圭子 (2011). 「第6章 地域日本語支援活動の現場と社会をつなぐもの—日本語ボランティアの声から」、植田晃次・山下仁編著『新装版「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』、三元社、pp. 127-155.

山田泉 (2018). 「第1部『多文化共生社会』再考」、松尾慎編著『多文化共生 人が変わる、社会を変える』、凡人社、pp. 3-50.